

**「みんなの活躍をみんなで支える 2020 年へ」
—パラリンピックを身近に感じ、自分との関わりを考えよう—
2020 年東京オリンピック・パラリンピック連携大学山形シンポジウム
【開催報告】**

日時 平成 28 年 2 月 19 日(金) 15:30~17:35
 会場 山形県立保健医療大学 講堂
 主催 山形県、山形県教育委員会
 共催 山形大学、東北芸術工科大学、東北公益文科大学、東北文教大学、東北文教大学短期大学部
 山形県立保健医療大学、山形県立米沢栄養大学、山形県立米沢女子短期大学、山形市
 山形市教育委員会、公益財団法人山形県体育協会、山形県障がい者スポーツ協会
 山形県理学療法士会、山形県作業療法士会
 協力 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

＜参加者＞ 210 人

- ◇ 大学生・専門学校生 111 人
- ◇ 高校生 2 人
- ◇ 一般参加者 81 人
障がい者スポーツ関係団体
障がい者スポーツ支援団体 等
- ◇ 出演者・関係者等 16 人



1 主催者挨拶

(1) 山形県企画振興部長 高橋 広樹

- ・ 今回のシンポジウムは、パラリンピックに対する気運を醸成し、東京大会に支える立場としてどのように関わることが出来るかを参加者に考えてもらうことを目的としている。
- ・ シンポジウムでは活発な意見交換がなされ、パラリンピックや障がい者スポーツに対する理解と地域の活性化に繋げてもらいたい。

(2) 山形県立保健医療大学 学長 青柳 優

- ・ パラリンピックはもともと第 2 次世界大で主に脊髄を損傷した兵士のリハビリの一環として行われた。今日では、参加国・参加者も増加している。
- ・ 2020 年の東京大会は、1964 年の大会に続き、2 回目の開催。同じ都市でパラリンピックが 2 回開催されるのは初。今回のシンポジウムの参加の学生についても、医療関係者が多いと聞いているので、医療人として、どのように関わることが出来るのかを考えるきっかけとしてもらいたい。

2 講演「パラリンピックの概要と東京大会実施競技について」

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会パラリンピック統括課長 仲前信治 氏

- ・ パラリンピックはオリンピックと比べ、まだまだ認知度が低い。東京 2020 大会に向けてパラリンピック各競技の認知度向上、大会の盛り上がりの醸成、ブランド価値の向上に取り組んでいく。
- ・ パラリンピック競技は、一般的な競技ルールとは違い、「クラス分け」や「ポイント制」などのルールや用具、コート面で違いがある。(安全・健康に競技をするため)

【質問(一般参加者)】

Q:2020 年の東京大会のレガシーとして、どのようなものが考えられるか？

A:形に残るものとしては、国立競技場、施設のバリアフリー化などが挙げられる。形に見えないものとしては、1校1国運動のような盛り上がりや観光支援への取り組みなど。大会以降もインバウンドが広がることを期待している。

3 意見交換・質疑(障がい者スポーツアスリートとパラ競技トレーナー等の体験談を聞き、会場と意見交換) コーディネーター

山形県立保健医療大学保健医療学部作業療法学科 講師 千葉登 氏

シンポジスト

- | | |
|----------|--|
| ① 太田渉子 氏 | パラリンピアン:2006トリノ銅(バイアスロン)、2010バンクーバー銀(クロスカントリー)、2014ソチ日本選手団旗手 |
| ② 永井恵子 氏 | 障がい者スポーツ選手:2014仁川アジアパラ競技大会銅(シッティングバレー) |
| ③ 武田正幸 氏 | 日本パラ陸上競技連盟トレーナー(町立真室川病院 理学療法士) |
| ④ 笹原一馬 氏 | LE 在宅・施設訪問看護ステーション 作業療法士 |
| ⑤ 仲前信治 氏 | 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会パラリンピック統括課長 |

<千葉 登 氏>

- ・ 2020 年の大会まで残り 4 年となり、参加者の方には、自分自身どのような形でパラリンピックや障がい者スポーツに関わることが出来るか考えてもらいたい。
- ・ このシンポジウムをきっかけに少しでも障がい者スポーツへの理解が深まることを期待する。

<太田渉子 氏>

- ・ メダルを獲得した時に、周囲のチームメイトやボランティア、スタッフの方がとても喜んでくれて、同じ目標に向かってきて、それが報われたことが非常に嬉しかった。
- ・ 今回、シンポジウムに参加している学生は医療系の方が多いので、自らが勉強してきたことや、強み・特技・興味のあることを活かし、2020 年の東京大会を支えてもらいたい。
- ・ 今は、インターネットの SNS などのツールがあるので、それを使って関係者や選手と積極的に仲良くなってもらいたい。

<永井恵子 氏>

- ・ 2014 年仁川アジアパラ競技大会の閉会式の際に「ボランティアも主役」との言葉があり、感銘を受けた。障がい者スポーツは、支えがあってこそその競技と思っている。
- ・ 障がい者スポーツは、健常者もプレーヤーやスタッフとして関わる場面がたくさんある。関心があれば積極的に動いてほしい。

<武田正幸 氏>

- ・ 世界選手権へ帯同した際は、トレーナー3人体制で選手をサポートした。練習後のケアが深夜にまで及ぶこともあり、すべきことは多いが、自らがサポートした選手が金メダルを獲得した際の喜びは大きい。
- ・ パラリンピック競技は、障がいによって、様々な競技がある。視覚障がい者のガイドランナーや審判、トレーナーなど多様な関わり方があるが、2020年の東京大会に向けて、まずは、その競技を見て、知って、楽しみ、盛り上がってほしい。

<笹原一馬氏>

- ・ 障がい者スポーツに関わる人が増えることで、障がい者の地域参加向上による地域の活性化や地域ノーマライゼーションの考え方の浸透など、さまざまな利点生まれる。
- ・ そのためには、SNSを用いた障がい者スポーツ情報の拡散や障がい者スポーツイベントへの積極的な参加をしてもらいたい。

<質疑応答>

(質問／学生)

Q:2020年の東京大会に向けて、医療系の学生である自分たちはどのように関わることが出来るか。

A:大会時に医療系のボランティアスタッフとして関わったり、武田先生のようにトレーナーとして関わったりすることも出来る。関わり方にはさまざまな形があるので、色々な可能性を探ってほしい(組織委員会 仲前課長)

(質問／一般参加者)

Q:パラリンピックや障がい者スポーツ出場選手のドーピング違反はどの位あるのか。

A:あまり報道される機会はないが、実際にドーピングに引っかかる選手はいる。普段使っている薬やサプリメントがドーピング違反とならないよう、トレーナーとして気を付けている。場合によれば、風邪薬も違反となる成分が含まれる場合がある。(シンポジスト 武田氏)

(発言／一般参加者)

- ・ 山形県内でもさまざまな障がい者スポーツの組織があり、それぞれの競技ごとに体験する機会の提供などを行っている。障がい者スポーツ普及のため、若い方にまずは体験してもらい、競技人口を増やしていきたい。

以上

